

技術・家庭科部実践① 小学校 第5学年 「みそ汁を作ろう」 9時間

目標 ゆでる調理を生かしながらみそ汁を調理することができるようにする。そして、だしやみそ、実の組み合わせなど工夫して自分の目的に応じてこれからの生活の中でみそ汁を作ろうとする意欲的な態度を育む。

時	学習活動の概要	指導上の留意点
① ②	<p>(ねらい) インスタントみそ汁の試食や、手作りみそ汁の試食との比較などを通して、みそ汁作りに対する興味や関心を高める。</p> <p>・インスタントみそ汁を試飲し、その感想を共有する。 「おいしいけど、ちょっと濃い味だな」 「具の味があまりしないな」 「お湯を注ぐだけで飲めて便利だけど、作った気がしないな」</p> <p style="text-align: center;">↓</p> <p>「手作りのみそ汁が飲みたい！！」</p> <p>・手作りのみそ汁を試飲し、インスタントみそ汁と比較しながら、その違いを共有する。 「インスタントみそ汁に比べて、味がうすいけど、ちょうどいいな」 「具の一つ一つの味がしておいしい」 「手作りだと温かい感じがする」</p> <p style="text-align: center;">↓</p> <p>「自分でみそ汁を作りたい！！」</p>	<p>○調理方法、味・実の3点を中心に比較の視点とする。</p> <p>○インスタントみそ汁の手軽さやおいしさを肯定しつつ、手作りの良さを改めて実感することで、手作りのみそ汁を作りたい、食べたいという思いを引き出し、興味や関心を引き出す。</p> <div style="text-align: center; border: 2px solid black; padding: 10px; margin: 20px auto; width: fit-content;"> <p>POINT 1 やっぱり、手作りみそ汁を作りたい！</p> </div>
	<p style="text-align: center; border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px auto; width: fit-content;">◎オリジナルみそ汁を作って家でもおいしいみそ汁を作れるようになる</p> <p>・どのようなみそ汁を作りたいか考える。 →中に入れたい実やみその種類など自由に語り合う。</p> <p>・子どもたちの生活経験の中で知っていたり、予想したりしたみそ汁の作り方を出し合い、これから調理するに当たって、明らかにすべき手順を確認する。 「いろいろな具をいれるぞ」→何が合うかな！？ 「みそももちろんいれるな」→どんな種類がある！？ 「だしもいれるなあ」→だしてなんだろう！？ 「どのタイミングで作るといいかな」</p> <p>・いろいろなみそやだしを飲み比べ、その違いを実感する。 「だしやみその種類によって、味が変わるな」 「だしだけじゃおいしくないけど、だしを入れると、おいしいみそ汁になるんだな」</p> <p style="text-align: center;">↓</p> <p>「どんなみそ汁を作ろうかな？ どうやって作るのかな？」</p>	<p>○どのようなみそ汁を作りたいか、自分の好みや実やみその種類、それぞれの家庭で定番なみそ汁など自由に語り合うことで、「作りたい！」「食べたい！」という思いを高める。</p> <p>○調理方法について、子どもたちのこれまでの学習を振り返ったり、生活経験から予想したりすることで、不明確な部分を自分達の課題として捉えられるようにする。</p> <p>○だしやみその飲み比べをすることで、だしやみその種類を変えると、味も変わるということに気づき、自分の好みや目的に応じたみそ汁を作る際に選択肢の幅を広げられるようにする。</p>

③

(ねらい) みそ汁作りの手順を確認し、みそ汁の調理方法を知る。

④

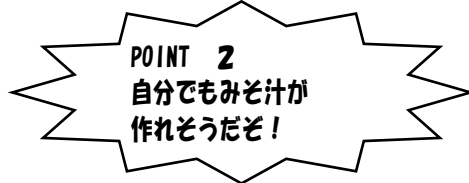
◎みそ汁の基本をマスターしよう

- ・前時で課題となったみそ汁の手順を確認する。
- ・各グループに分かれて、共通の材料で調理をし、みそ汁作りの基本を確認する。



「みそ汁の作り方がわかったぞ」
 「自分でも作れそうだな」
 「自分だったら・・・〇〇なみそ汁を作りたいな」

- みそ汁作りの基本として、だし→実→みその順番を確認する。
- 実の入れるタイミングを、これまでの学習を振り返りながら確認する。
- だしの取り方やみその入れ方など確認し、調理をする。



(ねらい) みそやだし、実の合わせ方や切り方、ゆで加減を考えながら目的に応じたみそ汁作りの計画を立てるための視点を獲得することができる。

⑤

◎もっと“深イイ”オリジナルみそ汁にするために・・・先生の家で作って欲しいオススメみそ汁を考えてみよう

- ・グループごとに、教師の家族(教師・妻・子ども9歳・6歳・2歳)に対して、どのようなみそ汁を作るとよいか考え、各グループで考えた計画を学級全体で交流しつつ、気づいたことを出し合う。

「家族みんなの好きな実を入れよう」
 「小さい子どもも食べやすいようにやわらかくしよう」
 「みんなが笑顔になるようなみそ汁にしたいな」



「作り方を工夫すると、小さい子どもでも食べやすいみそ汁ができるぞ」
 「家族みんなの好みを取り入れると、みんながおいしく食べられそうぞ」
 「食べる家族のことを思って作るともっといいみそ汁になりそうぞ」

- 教師の家族に対するみそ汁の計画を共通の課題として学級で考えることで、一人一人のオリジナルみそ汁を作る計画を立てる時の視点を広げることができるようにする。
- 主に「調理方法」と「組み合わせ」の視点でどのような視点があるか、グループでの活動の際にはたらきかけていく。

(ねらい) 自分の目的を明らかにしながら、目的に応じたみそ汁作りの計画を立てることができる。

⑥

◎パワーアップしたオリジナルみそ汁の計画を立てよう。


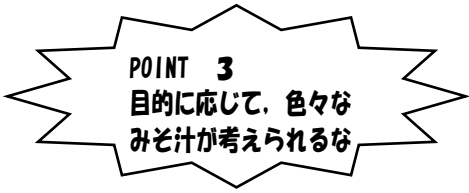
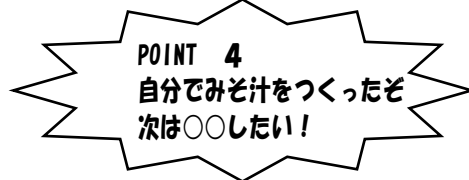
⑦

- ・前時をふり返り、よりオリジナルみそ汁をパワーアップさせるための視点を整理する。

～最初の計画での主な視点～
 「味」「自分の好みの実」「試してみたい」の視点が中心



- 前時のふり返りとパワーアップしたオリジナルみそ汁作りの計画の視点として、「調理方法」と「実・みそ・だしの組み合わせ」に整理する。
- 最初の計画での視点と照らし合わせることで、自分たちが獲得できたことが意識できるようにする。

<p>⑧</p>	<p>～前時の学習を通して獲得した視点～ 「調理方法の工夫」(ゆでるタイミングと時間) (切り方) 「自分以外の食べる人(家族)の好み」 「健康」(カロリー、栄養バランス) 「見た目(いろいろ)」 「経済面」(あるもので、安く) 「手軽さ」(短時間でできる)</p> <p>・図書館やメディアルームなど活用し、情報を得ながらオリジナルみそ汁の計画をパワーアップさせる。</p> <p style="text-align: center;"></p> <p>「最初は自分の好きなものだったけど、最終的には視点も変わって、もっといい視点を見つけられて良かったです。私は、家族の好みと手軽さ、経済面を考えて、調理方法を工夫してやってみたいです」</p>	<div style="text-align: center;">  <p>POINT 3 目的に応じて、色々なみそ汁が考えられるな</p> </div> <p>○ワークシートに記入欄を設け、計画する中で、自分が取り入れた視点が明確になるようにする。</p>
<p>⑨</p>	<p>(ねらい) 計画に沿ってみそ汁を作ることができる。</p>	
	<div style="text-align: center; border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;"> <p>◎パワーアップさせたオリジナルみそ汁を作ろう</p> </div> <p>・一人一鍋で自分の計画したみそ汁を作る。 →調理器具や食器の準備のみグループで行い、その他の調理の過程は全て自分で行う。</p> <p>「実を少し大きく切りすぎて火が通りきっていませんでしたので、次作る時には少し小さく切って作りたいです。」 「食べる人、作る時のことを考えました。いろいろはとても重要なことだと思います。旬の物を使うといいし、季節によって変わっていたり、楽しみもあると思いました。」</p>	<p>○これまでの学習の過程を掲示し、ふり返りながら調理できるようにする。</p> <div style="text-align: center;">  <p>POINT 4 自分でみそ汁をつくったぞ次は〇〇したい!</p> </div> <p>○失敗した場合でも、原因を探ったり、次への課題がしっかりと述べられたりしていることや、実生活での実践に向けた意欲に価値づけをしていきたい。</p>


～ポイント解説～

POINT 1 子どもたちが真に「みそ汁をつくりたい」と思えるような手立て

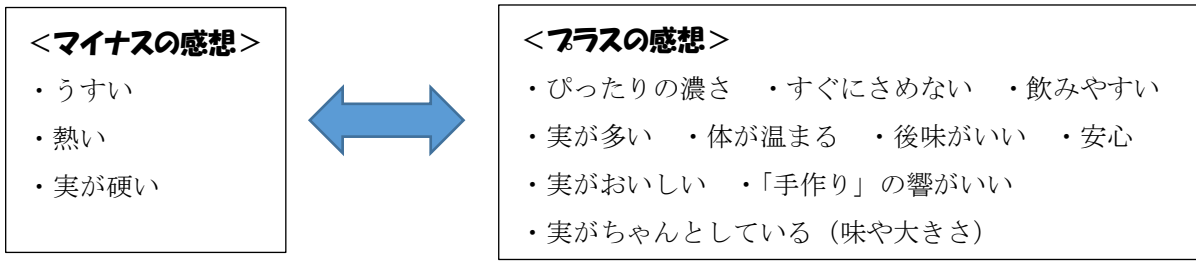
実習を伴う学習では、それだけで子どもたちは意欲をもって取り組む。その意欲に、子どもたちの「～したい」という願いや「なぜだろう」「どうしたらよいだろう」という疑問など、生活を見つめ直し、日常生活から問題を見出すことを加えることで、学習はより深く、実生活に生かせるものになると考える。

導入となる第1・2時では、子どもたちが真に“みそ汁を作りたい”と思えるような手立てとして、インスタントみそ汁と手作りみそ汁の試飲をした。

まず、インスタントみそ汁を自分たちで調理(袋を開けてお湯を注ぐ)し、試飲をした。その際の子どもたちの感想は以下の通りである。

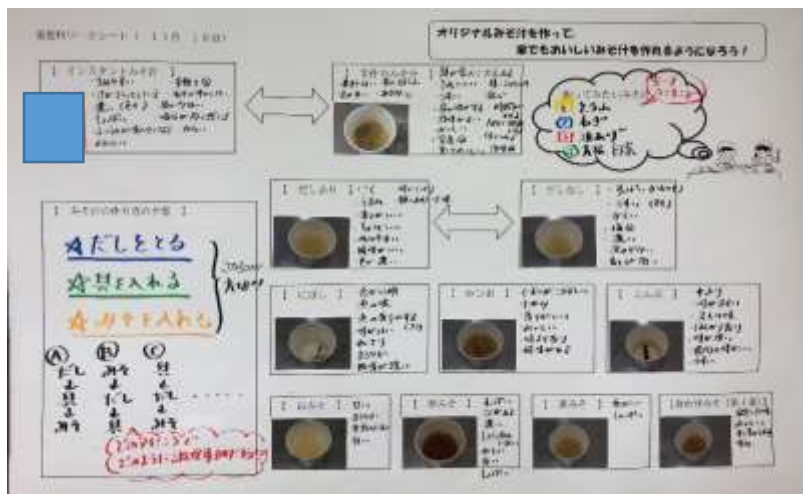
<p><プラスの感想></p> <ul style="list-style-type: none"> ・おいしい ・手軽 ・濃くておいしい ・飲みやすい 		<p><マイナスの感想></p> <ul style="list-style-type: none"> ・塩分が多そう ・ずっとは飲めない ・体調が心配 ・実(ねぎ・わかめ)やみその本来の味がしない ・濃い(からい) ・栄養があるか心配 ・自分の思う量じゃない(実が少ない)
---	---	---

インスタントみそ汁を試飲することによって、その便利さやおいしさを感じつつも、味や量など物足りなさを感じていた。「ふつう(手作り)のみそ汁が飲みたい！」と改めて感じる子どもたちに、次に、教師が作ったみそ汁(油揚げ、とうふ、はくさい、ねぎ)を試飲してもらった。



もちろん、個人の味覚によって違いはあるものの、手作りのみそ汁を飲むことで、インスタントみそ汁にはない味や食感を感じることができた。この味や食感の違いから、子どもたちは、手作りのよさを感じたり、自分が作る時には～を入れてみたいという願いをもったりすることができ、「自分でみそ汁を作りたい」という真の意欲を高めることができた。

POINT 2 “自分でみそ汁が作れそうだな” と思えるような共通の土台づくり



子どもたちの生活経験の差は、家庭科の学習を進める上での課題のひとつである。みそ汁作りに関して、すでに一人で作りきることができる子どももいれば、初めて作るという子どももいる。そうした中で、学級全体での学び合いを保障するためには、共通の経験を積み、同じ土台をつくることが重要であると考え、よって、本題材の流れの中にも、みそ汁の作り方の基礎を学級全員で学ぶ場を設定した。また、だしやみその種類により味の違いについても試飲を通して体験した。



子どもたちは、この学習を通して、さらに自信をつけたり、自分にもみそ汁が作れそうだなという見通しをもったりすることができた。また、だしやみその試飲を通して、だしやみそ、実の組み合わせ方で様々なみそ汁ができるということを知り、みそ汁についての興味関心を高めることができた。

なお、基礎基本の知識・技能の習得の場面で指導する際には、教師からの一方的な指導にならないように、例えばみそ汁作りの手順を押さえる際にも、子どもたちのこれまでの生活経験を引き出しながら確認するなど、子どもとの対話を心掛けていきたい。

POINT 3 みそ汁の可能性～目的に応じたみそ汁 → POINT 4 実生活へ～次は〇〇したい!



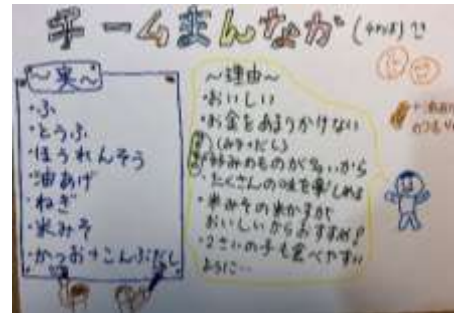
みそ汁作りに見通しがもてた子どもたち。自分でだしやみそ、実を選び調理する前に、よりよい計画が立てられるようにということを目的に、グループごとに、教師の家族に対するみそ汁の計画を考えた。

それまでは、自分の好みの実を入れて作りたいという考え方が中心であったが、“好み”という一面的な考え方だけでなく、計画を立てる際に生かせる多面的な視点を獲得することで、より自分の目的に応じたみそ汁を作ることができ

ることを実感することで、よりよい計画につなげることができる。

夫婦に 9 歳、5 歳、2 歳の子どもの構成の教師の家族に対するみそ汁を考えた。

まず、みそ汁を作る対象が「自分」だけではなく「家族」ということで、好みという視点も、自分だけでなく、家族みんなの好みという視点加わった。また、味だけでなく、栄養や経済面、いろいろなどの工夫をすることでもっといいみそ汁になるのではという視点加わった。さらに、まだ硬いもの、大きなものが食べられない 2 歳の子どものいることで、切り方や火の通し方など、調理方法の工夫にも目を向けることができた。



これらの視点を踏まえて、再度計画を立て直し、一人一鍋で 2 回目の実習を行った。

子どもたち一人ひとりのみそ汁に対しての思いも高まり、実の組み合わせや調理方法など、様々な工夫が見られた。自分の思いが形になることで、子どもたちの満足感もとても高かった。中には失敗したり、納得できなかったりしたところもあったが、なぜ失敗したか、次に納得するためには、どうすればよかったかという子どもたちの振り返りをしっかりと価値づけることで、成功体験からだけでなく、実生活での活用に向けた意欲や態度につなげることができた。

成果と課題

インスタントみそ汁は、私たちの生活にとって身近であり、簡単に調理しおいしく食べることができる。しかし、企業の努力によって様々な種類のみそ汁があるとはいえ、自分の目的に 100% 合致するみそ汁はなかなかない。実やみそ、だしの組み合わせ、調理方法、作る相手(家族)に対する思いなど、色々な目的に応じて、調理できることが、手作りのよさである。インスタントみそ汁と手作りのみそ汁の試飲を通して、手作りのよさをより実感し、自分の手でみそ汁を作りたいという意欲を高めることができ、主体的な追及の土台を構築できたと考える。

また、教師の家族を対象にして、学級全体で考える場を設定したことは、子どもたちの対話を促し、多面的な見方・考え方を獲得する手立てとして大きな効果があったと考える。家庭科の学習対象である「家庭」は子どもたち個々それぞれある。個々の実生活に生かせるようにするためにも、学級全体で課題を解決するための多面的な見方・考え方を獲得できるような題材構成を今後も工夫していきたい。

これまで、本学校園技術・家庭科では、課題を多面的にとらえ、身に付けた知識や技能を活用する力の育成を視点に実践を積み重ねてきた。新学習指導要領における、生活の営みに関する見方・考え方に通じるところだと考えている。本実践も含め、これまでの実践とこれからの家庭科学習で重要となる見方・考え方、また資質・能力の育成との関連を整理しながら、実践を積み重ね、よりよい、より豊かな生活や社会を創造する子どもたちを育てていきたい。

技術・家庭科(家庭分野)における資質・能力の育成

21世紀を生きぬくため、急激な社会の変化に主体的に対応することが求められている今、本学校園技術・家庭科部では自分たちの暮らしを見つめ、よりよい生活・社会を目指して工夫し創造することのできる子どもの育成をテーマに研究に取り組んできた。また、子どもに備え付けさせたい資質・能力のうち

○よりよい生活や社会を創造するために必要な知識や技能

○課題解決を目指し、身につけた知識や技能を場面に応じて活用する力

○よりよい生活や社会を創造する力

の3点を挙げ、さらに課題を「多面的にとらえる」ことを通して、課題解決に向けて身につけた知識や技能を場面に応じて活用する力の育成に焦点をあてて、研究を進めてきた。

平成28年8月に中央教育審議会教育課程部会から「次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ」が公表され、全教科等においてそれぞれの特質に応じた「見方・考え方」が整理され、家庭科、技術・家庭科(家庭分野)では、「生活の営みに係る見方・考え方」が以下のように示された。

家族や家庭、衣食住、消費や環境などに係る生活事象を、協力、協働、健康・快適、生活文化の継承・創造、持続可能な社会の構築等の視点で捉え、よりよい生活を営むために工夫すること

今年度研究の重点とした課題を「多面的にとらえる」ということは、まさに課題を解決するための一連の学習過程の基軸となる「生活の営みに係る見方・考え方」で捉えていくということである。

それでは、平成29年度の本附属学校園における家庭科、技術・家庭科(家庭分野)の研究授業ではこの課題を「多面的にとらえる」ためにどのような工夫が行われていたのかを検討してみたい。

小学校では、みそ汁を題材に、教師の家族に対して、みそ汁作りの提案を行うための計画を立てるという授業であった。家族の好みや年齢などの状況を踏まえ、実の組み合わせ方や調理の仕方、みそやだしのとり方について、想定した家族の好みや健康、年齢などの状況、作り手の思いなど多面的な視点を明確にすることで、計画を立てた理由をしっかりと表現できるような学習過程となっていた。また、各グループの計画を全体で共有することで、自分たちの計画にはなかった視点を取り入れる生徒の姿が見られた。

中学校では、「家庭生活をよりよくしていこう」という題材で、幼児や高齢者との関わりや知識をもとに、家族・家庭・地域について考えを深めることで、これからの生活において家族・家庭・地域における課題を解決する力や実践的態度を養うというねらいで授業が行われた。家庭生活をよりよくするためには、家族・家庭の仕事、地域社会などさまざまな既習の学習を基に多面的に課題を見出したり考えを広げ深めたりすることが大切である。

対象の生徒は、1年時の総合的な学習の時間において、高齢者福祉施設を訪問し、高齢者との交流を体験している。また、毎年附属幼稚園小学校中学校の3学校園での交流を行っており、異年齢の人との活動を経験している。さらに、「高齢者について考えよう」という学習において、社会福祉協議会の方の講話が行われている。これらの体験的な学習を基盤として、家庭生活をよりよくするために、課題を見つけ解決策を考えるという学習が行われたため、生徒たちは家族の課題を家庭の中だけで解決策を探るのではなく、地域、そして社会と家庭を結びつけ、多面的に解決策を探ることができていた。

今後は、「多面的にとらえる」学習場面において、どのような学びが行われているのか、またさらにその学びを深めるための方法を探っていく必要があると考える。

(共同研究者：島根大学教育学部人間生活環境教育講座、鎌野 育代)